

## 江戸期刊行『古文真寶後集』

### 総振仮名付本の版種及び和訓について

はじめに

山口 謠司

室町時代、広く五山の僧侶の間で読まれた『古文真寶』は、江戸時代書肆の発達に伴ってより広範な読書層を得た。それは、書名にも見える如く、本書には漢代から唐宋に至る詩文の名宝と目される作品が採録されているからに他ならない。簡易な文章で、しかも読みを重ねるごとに深く中国の精神史に触れることが出来る本書は、漢文を読み、漢文で記すことが必須であった時代、寺子屋でも初学入門の教科書として使用された。従ってここに採録された文章は、江戸期の文人たちにとって『四書』同様、教養として共通の基盤をもったものと見なすことが出来るであろう。既に指摘されるように、松尾芭蕉の俳書や滝沢馬琴の読み本の類にも本書からの引用が見えることは、本書の広い普及を物語るものである。

さて、『古文真寶』は、以上の如く江戸期の文芸を考察する上でも、重要な書籍であるが、江戸初期以来明治に至るまでに開版された夥しい版種の覆刻、修、印の関係は未だ必ずしも明らかにされてはいない。

筆者はこれまで約二百種に及ぶ『古文真寶』を収集し、随時考察を加えて来た。今後更に別に稿をものしたいと考えているが、このうち、今回は特に、江戸前期以降に刊行された全編にわたって本文に振り仮名付を施されたものについて振り仮名の相違を主に使いながら版種の別を調査したので以下、これについて報告を行いたい。

#### 一、『古文真寶後集』総振り仮名附刻本について

『古文真寶後集』総振り仮名付き本は、長沢規矩也博士編『和刻本漢籍文集』に、万治三（一六六〇）年刊本の影印が収められている（注一）。

この解題のなかで博士は、「特に古い読法を伝えたこのテキストは国語学研究の上にも益するので、縮印を避けて原寸に近い形で影印することにした。」と記される。

古い読法と考えられた箇所を、博士は具体的には挙げられないが、次のような読み方をさしているのではないかと考えられる。

巻一、屈平「漁父辭」の「葬於江魚之腹中」を「こうぎよのふくちうにはうふれなんとも」、また陶淵明「歸去來辭」の「窈窕」に「ようてうと をぐろうして」、同杜牧之「阿房宮賦」の「覆厭三百餘里」を読んで「さんはくよりを、ふあふしておほひニをして」と読むこと。

巻の二韓退之「師說」、「雜說」、蘇老泉「名二子說」、蘇東坡「稼說」、周茂叔「愛蓮說」の「說」字を「ぜ

い」と読むこと。

卷三、王勃「滕王閣序」の「下陳蕃之榻」を、「ちんはんがしぢをくだす」、また同じく「枕夷夏之交」を「あかのあはいにのぞみ」と読むこと。

卷四、王逸少「蘭亭記」にも散見するごとく、「會」字を「くはい」、「修」字を「しゅ」、「所以」を「いへん」と読むこと。

卷五、孔徳璋「北山移文」の「拉許由」を「きよゆうをとりひしぎ」と読むこと。

もとより、こうした読み方は附訓本を刊行した出版者乃至は刻工の出身地域性、またあるいは彼らの教育の背景にも大きく影響を受けるところである。したがって、ここに示された読みが、必ずしも当時の一般的な『古文真寶』の読みであったと見なすことは出来ないであろう。

影印に附された本書は、刊記に「次郎兵衛（木村次郎（印模））」と見えるごとく恐らく京都で出されたと考えられるものである（注二）。してみれば、『古文真寶』に収録された作品のうち平安期から『文選』等に収められたものは、あるいは博士家の読法を踏襲している可能性もないとは言えない。

しかし、江戸初期から江戸前期にかけては、日本語の歴史の上に於いて東国と西京の言葉が衝突しつつ新しく変化を遂げる時期であった。それは、鎌倉末期に確立したとされる当時の口語体の定着としての漢文にも少なからず影響を及ぼしたと考え得る。のみならず、本書刊行の頃には、既に林羅山等により朱子の解釈に従った四書や五経が江戸で開版され全国に普及しはじめていた時代でもある。

長沢博士が言われる如く、『古文真寶後集』の総振り仮名本は、日本語の古訓を留めているという点に於いてまさに珍重すべきものと言えるのである。

### 三、『古文真寶後集』総振り仮名附刻本の書誌及び古訓について

さて、『古文真寶後集』総振り仮名附刻本は、長沢博士が影印に使用された万治三年刊本を祖とし、以降弘化年間に至るまで数種が出版された。このうち筆者はこれまで大きく五種に分類出来るものを収集するを得た。以下、これらについて詳しく書誌を記したい。

#### 「江戸前期」刊本片仮名総振り仮名本

筆者は、これまで後印本も含めて、この「江戸前期」刊と思しき片仮名総振り仮名本を八種を収集した。これらは、大きく二種に分けられる。

ひとつは、全巻を上、下に分巻するもの。もうひとつは全巻を十巻に分類するものである。

(一) 先ず、上下分巻本について説明しよう。

上下分巻本は三種類に分けられる。

いずれも覆刻の関係で、どれをもって原刻本であるかを証明することは出来ず、また筆者所蔵の中には、字体

より見て原刻本はないようであるが、原表紙を有する一本を以って書誌を示そう。

① 縹色表紙、原題簽「(絵入) 古文後集 片カナ付」と。至正丙午鄭本土文叙に次いで「諸儒箋解古文眞寶後集 目錄」。巻首内題「魁本大字諸儒箋解古文眞寶卷之上 後集」と。四周单边無界八行十七字。版心「古文上(下) ○丁付」。題簽に記される如く、本来絵入り本であるが、絵入り丁の版心には、例えば「○又十五」の如く刻され、これよりして絵入り丁は間々省かれて製本されたものもあると思われる。巻末題「魁本大字諸儒箋解古文眞寶卷之下終」と。半紙本二冊

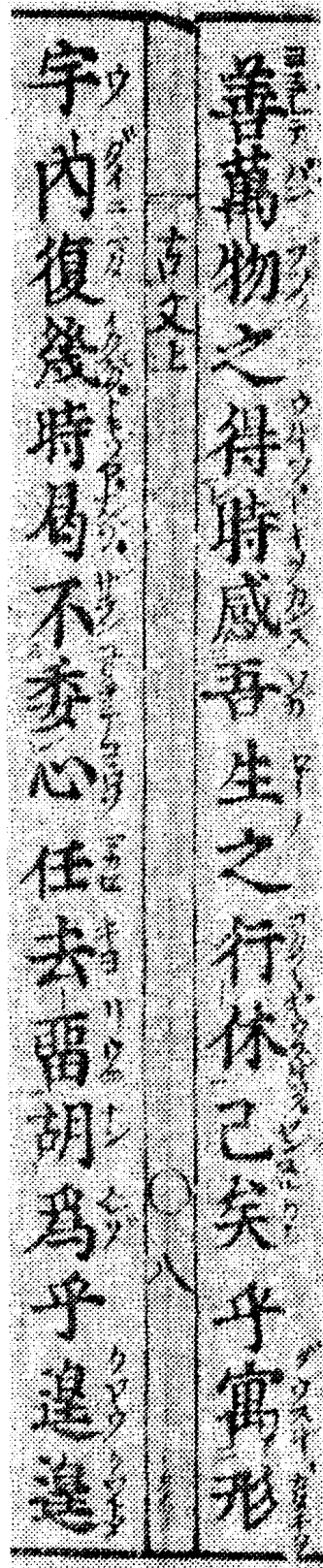
ここに示した本の表紙には「天保三(一八三二)年/宮ノ口村木元又右衛門上下二卷待之」、「安政五(一八五八)年十二月朔日/木元又右衛門/而持之/二冊」(いづれも括弧内西暦は筆者注)と墨筆の識語がある。

この識語は無論江戸後期から江戸末期に書かれたものであるが、本書の刊行は恐らく原刻本からさほど時代を経ない江戸前期に覆刻したものであると思しい。しかし、明らかに後印本と見なすべく、巻頭内題「魁本大字諸儒箋解古文眞寶卷之上」の振り仮名「クワイ ホン タイ ジ ショ ジュ セン カイ コ ブン シン ホウ ケン ノ」とあるべき「タイ」字の「イ」は、版木の摩滅から剥落するなど特に小字で附された仮名に間々判読し難き欠落のあることは注意さるべきであろう。



筆者は、これと同版のものに「安永九（一七八〇）庚子五月一日／智信」また「専立寺藏書」の墨識語があるもの。また「塔森村／長■也」の墨識語（■は墨消し）の上に「伏見森寫氏所持」と朱識語ある上巻のみの端本、また識語もない上巻端本を所蔵する。

この種類の「江戸前期」刊無書肆本の特徴は、上巻、第八丁目の版心上部に版木の乱れが見えることである。これを写真で示したい。

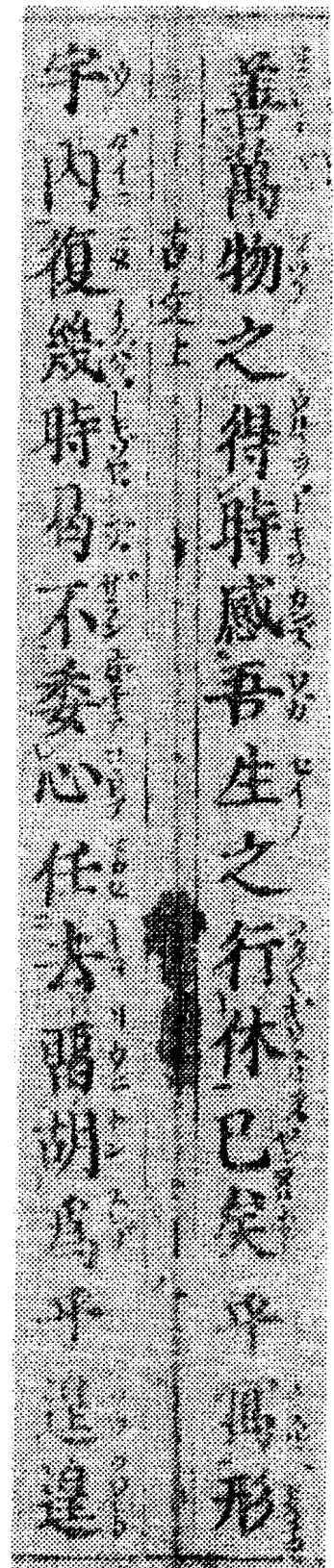


② 「江戸前期」刊元禄七（一六九四）年修「天明二年」印本

次に、上下分巻本の原刻本を覆刻したものと考えられるもので元禄七年の印記あるものについて記そう。

版式は①で挙げたものと同じである。但し、鄭本土文叙のある裏丁に「元禄七甲戌閏五月中旬／江戸日本橋南壹丁目／書林 山口屋權兵衛板」と埋木あるものがある。これも本の大きさは半紙本。二冊。

①で示したものは明らかに別版で、上巻第八丁版心上部に版木の乱れは見えない。



また、①に比較しつつ目録を見るなら、①には「卷之三」「卷之四」「卷之五」にそれぞれ「ケン ノ サン」、「ケン ノ シ」、「ケン ノ ゴ」とあるが、本書には「ケン ノ」までを記して数字に振り仮名を振らない。卷上、希文「嚴先生祠堂記」の「相尚以道」の振り仮名を①は「アヒ タツトベルニ ミチヲ モツテス」とある箇所を本書は、「アヒ タツトベルヨ ミチヲ モツテス」と、誤刻する。また、卷下張子厚「東銘」の「戲言出於思也。戲動作於謀也」を①が「チ（あるいはキ？） ゲンナレトモ オモフヨリ イツ キ トウナレトモ ハカルヨリ ヲコル」とあるを「ケ ゲンナレトモ ヲモフヨリ イツ ケ トウナレトモ ハカルヨリ ヲコル」と。

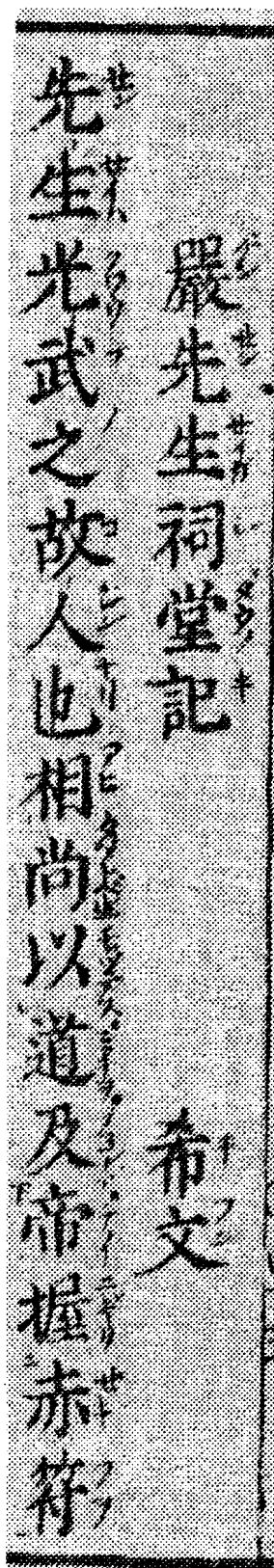
元禄七年の埋木ある「天明二年」印本しか見ることが出来ないため、この種の原刻本がこの辺りどうなっていたのかを確かめ得ないが、これについては今後更に同種版本の収集を得て発表したいと考える。

尚、本書は先に述べた如く、天明二年の後印本である。それは、卷末に「春星堂蔵版目録 浪花高麗橋壹丁目 藤屋書林 北尾善七」とする広告を一丁半付すことによる。中に「古文真寶 片カナツキ 画入 二冊」とある

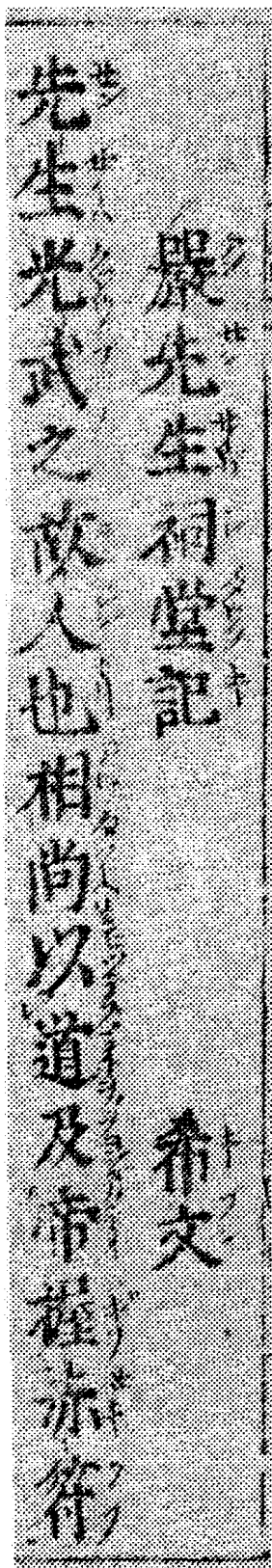
のは本書を指すものと思われるが、同じく広告に天明二（一七八二）年刊「豆腐百珍」を載せ、天明三（一七八三）年刊「豆腐百珍 続編」を「近刻」とする。恐らく本書は天明二年印本と考えて間違いないであろう。ただ、筆者臧本は、明治初期に刊行された石村貞一「国体大意」の表紙によって改装を加え、表紙に「古文真寶」と墨筆で打付書きされたものである。

尚、①との比較のために写真を以て上記箇所を示したい。

①「江戸前期」刊



②「江戸前期」刊 天明二年印本





③次に上巻のみ筆者所蔵の「江戸中期」刊の別版がある。

原装とは思しきも題簽は剥離し、②に見られた如き書肆名もない。目録の「卷之三」「卷之四」「卷之五」にそれぞれ「ケン ノ サン」、「ケン ノ シ」、「ケン ノ ゴ」と①と同じく振り仮名を付すが、上巻第八丁版心上部に版木の乱れは見えない。

賈誼「弔屈原賦」の「諄曰已矣」を、①本が「サイニ ツイテ イハク ヤンヌルカナ」とする箇所を②及び本書は「サイニ ツケテ イハク ヤンヌルカナ」と。

歐陽永叔「秋聲賦」の「四無人聲聲在樹間」を①が「ヨモニ ヒトノ コヘ ナシ コヘハ ウヘキノ アイダニ アリ」とあるのを②及び本書は「ヨモニ ヒトノ コヘハ ナシ コヘ ウヘキノ アイダニ アリ」。

周茂叔「愛蓮説」の「噫菊之愛陶後鮮」を①が「ア、キクヲ アイスルモノ ダウガ、ノチ、スクナシ」を②及び③は「ア、キクヲ アイスルモノハ、タウガ、ノチ、スクナシ」と。

このように見れば、②と本書は覆刻の関係上非常に近しいものと考えられるであろう。

しかし、既述の如く目録の巻数に振り仮名をつける点、また本書③には、李太白「袁州州学記」の「劉氏一呼而關門不守」の「守」字を読んで「マボラ」としつつも、「ボ」の右横に「モ」と振り仮名を付ける等①、②いづれにも見えない訓もつけられる。

「守」を「マボル」乃至は「マモル」と読むことに関し、亀井孝は、直接これに触れないが、「言語の歴史」に於いて「サブライ」という語を例に取り、「ここで便宜いっそくとびに集約をほどこすならば、奈良時代から

平安時代にかけてひとたびマ行音はバ行音になり、室町時代にこんどは逆にバ行音がマ行音になる変化がおこつた」と、する(注三)。また、

カウブル<カウムル

ケブリ<ケムリ

タワブレ<タワムレ

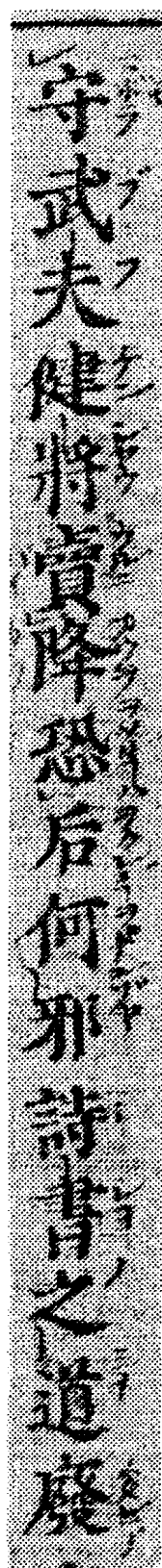
トブライ<トムライ

ネブリ<ネムリ

の例をも挙げ、ウとミの音韻交代が常にラ行の前に於いて起こることを示唆している。

「守」を「マモル」「マボル」と併記する本書訓点の場合も同じくラ行音の前で起つた変化である点、例外ではない。今、江戸期にあつて如何にして「マボル」が「マモル」に置き換えられて行つたかの時期を確定することは出来ないが、亀井は「口語の慣用の徴証につきその発掘と評価」という論考(注四)で寛文二(一六六二)年刊『京雀』を挙げ、本文には「富小路」に仮名を振つて「とミのこうぢ」とあるにも関わらず挿絵の見出しにあつては「とびのかうし」とされることを出し、当時京都にあつては「かりに「富小路」のばあいには、「トビ」の形のみが世俗一般におこなわれたものとの線をとるにしても、ここにさらに音韻そのものにおけるタームズに視点を移さんか、ほかにも散発的に似た様相を呈していたそれらスペシフィックな諸例を蔽つて、マ行とバ行とのけじめそのものがやはりここにそれ自体においておぼめかしかつたのではないか。」と。

本書がいつ、どこで刊行されたか、刊記なき故に筆者は不明である。しかし、もし、本書が「マボル」と「マモル」の併記がなされなければならない時期、つまり言い換えれば「マボル」の訓が消滅しつつある時期に本書があつたとするならば、おそらくこれは江戸も前期の終わりかあるいは中期に入るか入らないかという頃に刊刻されたものではないかと推測するのである。



(二) 次に同じく「江戸前期」刊本のうち、巻を十に分ける二種について記したい。

原装縹色表紙に原題簽「古文真寶後集」。巻頭に至正丙午鄭本土文叙に次いで「諸儒箋解古文真寶後集目録」。巻首内題「魁本大字諸儒箋解古文真寶卷之一 後集」と。四周单边無界九行十九字。版心は「古文上(下)丁付 一丁付」。半紙本二冊。

既述上下分巻本と本書の明らかな違いは行字詰にある。上下分巻本が八行十七字であるのに対し、本書は九行十九字詰め。また、上下分巻本が題簽に「絵入り」として挿絵を付すのに対し、本書ははじめから絵はなかったようである。

十巻分巻本もまた「江戸前期」刊本と思しい。筆者は二本所蔵するが、これらはいづれも覆刻の関係にある。

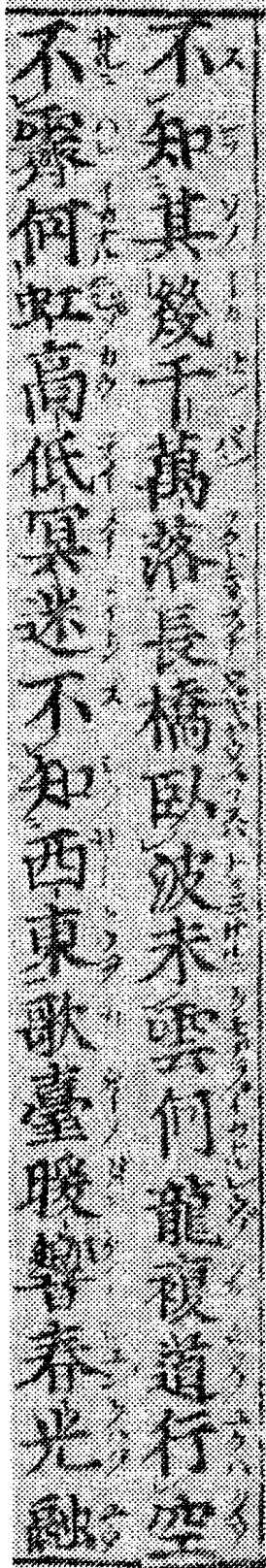
一本は表紙なき存巻首至巻四の端本である。

今、両者を比較するに、完本たる一本は卷一杜牧之「阿房宮賦」の「何龍複道行空不霽」を「イカナル レウゾ フク タウノ クウ ユクハ ハレ サルニ」とある箇所を表紙なき端本は「イカナル レウゾ フク タウノ ソラニ ユクハ ハレ サルニ」と。

卷二韓退之「師説」の「終不解矣」を完本が「ツ井ニ トケ ジ」と読むのを端本は「ウイニ トケ ジ」。

卷四、王元之「黄州竹楼記」の題の読みを完本は「クワウ シウ チク ロウ ノ キ」とする「黄州」の漢字の左傍に「ワウ ジウ」とするも、端本にはこれがない。

この十巻に分巻するものについては、覆刻の関係及び訓点の相違について、この二種だけでは明らかにし難い。ただ、これら二種が覆刻の関係にあることは間違いなく、また細部にわたってみれば、訓点にも異なる箇所があることは確かめ得た。



不 知 其 幾 千 萬 落 長 橋 臥 波 未 雲 何 龍 複 道 行 空  
不 霽 何 虹 高 低 冥 迷 不 知 西 東 歌 臺 暖 響 春 光 融

不知其後千萬落長橋臥波未雲何龍複道行空  
不露何虹高低冥迷不知西東歌臺暖響春光融

黃州竹樓記  
王元之

黃州竹樓記  
王元之

(三) 次いで、弘化年間に刊刻された二種に触れたい。

先ず、弘化三(一八四六)年の刊記を持つもの。

①原装濃臙脂色卍繋ぎ空押し表紙、筆者蔵本は下巻のみ原題簽を有し「(弘化■正)古文後集 (■は虫損)」と(或いは角書き「弘化」の下字は「改」字ならん)。巻首に鄭本土文叙、次いで「古文眞寶後集目録」。巻頭内題「魁本大字諸儒箋解古文眞寶卷之上(後集)」。

四周単辺、有界八行十八行。版心「弘化改正 古文後集 上(下) 丁付」。本の大きさは、美濃版を半分にし

た中本、二冊である。本書も(一)(二)同様片仮名で訓点を施す。

尾題「魁本大字諸儒箋解古文眞寶卷之下終」。卷末に「弘化三丙午年成刻／書房 江戸 須原屋茂兵衛・山城屋佐兵衛・英大助・須原屋伊八・岡田屋嘉七／大阪 秋田屋太右衛門／京師 著屋宗八・勝村治右衛門」の刊記あり。もう一種弘化四(一八四七)年刊本の書誌もここで示そう。但し、筆者臧本は下巻のみの端本である。

②原装濃臙脂色卍繋ぎ空押し表紙、原題簽「(弘化再刻)古文眞寶 坤 片仮名附」。卷首内題「魁本大字諸儒箋解古文眞寶卷之五」と。四周单边有界八行十七字。版心「古文後集 卷下 片〇丁附」。中本一冊。卷末に広告「古文後集 半紙形 片カナ付 全二冊／同 中本 全二冊／同小本 全一冊／同三ツ切懐中本 近刻」とあり「弘化四丁未年九月再刻成 発行書肆 江戸 須原屋茂兵衛・同 英大助／尾陽名古屋 永樂屋東四郎／攝陽 河内屋喜兵衛／京都 升屋勘兵衛板」と。

この二種の違いは、「江戸前期」刊本と同じく、分巻を①は「上下」と二巻にするのに対し②は十巻本とするところである。

今、更に卷五以下の本文を①、②で比較してみよう。

張蘊古「大寶箴」の「主普天之下」を弘化三年刊本は「フ テン ノ モトニ シュトシテ(「シテ」は「ノ」字)」とするのを弘化四年刊本は「フ テン ノ シタニ シュトシテ(「シテ」は「ノ」字)」。程正叔「視箴」の「心兮本虚應物無迹」を弘化三年刊本が「コ、ロハ モト キョ也。モノニ ヲフシテ(「シテ」は「ノ」

字) アト ナシ」とするのを弘化四年刊本は「シンハ モト キョ也 モノニ ヲ、シテ(「シテ」は「ノ」字)アト ナシ」と。王子淵「聖主得賢臣頌」の「夫荷旃被毳者難與道」を弘化三年刊本は「ソレ ハタヲ ニ ナイ センヲ キタル モノニハ トモニ イヒ ガタシ」とするのを弘化四年刊本は「ソレ ハタヲ ニナヒ ニコゲラヲ キタル モノニハ トモニ イヒ カタシ」と。

巻を緋けば両者の間に訓読の違いが多くあること、容易に気づくであろう。

弘化三年刊本はいまだ古訓を残している点も多いが、弘化四年刊本は例えば張子厚「東銘」を「ヒガシ」、陶淵明「歸去來辭」を江戸前期刊本が「キ コウ ライノ コトバ」とするところを「キ キョ ライノ コトバ」と読む如く、明治以降の漢文読みに近づいている。

弘化刊本は、刊記によっても知られる如く、いづれも江戸の書肆須原屋茂兵衛、英大助を共通の版元としているにも関わらず、弘化四年刊本には江戸初期から活躍していた京都の書肆勝村治衛門をはずして江戸中期に活躍を始める升屋勘兵衛へ、また名古屋を背景に江戸後期以来着々と実力をつけてきた永樂屋東四郎を版元の一人に据える。升屋はともかく、永樂屋が出した本で、筆者は古訓を付したものがあつたのを知らない。もし、こう言うことが許されるならば、或いは古訓を退け漢文をより近代的になさしめた背景に永樂屋等新進の書肆或いは、彼の背後にあつた儒者が何らかの影響を持ち得たことを推測することは今後の調査の課題とするに足りるであろう。

(四) 三ツ切横本について

既述、弘化四年刊本の広告に「近刻」とある三ツ切本に当たると思しい筆者臧上巻端本について記したい。本書は、美濃版を三ツ切にした横本で、原裝淺葱色表紙に原題簽「古文後集 振仮名附 上」。封面に「古文後集」と。巻首鄭本土文叙の後、明弘治十五年青藜齋の「重刊古文真寶跋」を置き「古文後集卷之上目次」。巻頭内題「古文真寶後集卷之上」と。四周单边有界十二行十字。版心「古文後集 卷幾 丁附」。刊記欠。恐らく、弘化四年を隔たること僅かにして刊行されたものと考えられる。

本書に古訓を残すところはほとんど見あたらないようであるが、筆者臧弘化四年刊本は下巻のみを存し、本書が上巻のみを残しているから、これらと比較することは出来ない。但し、弘化三年刊本に比して、万治三年刊本及び「江戸前期」刊本に則ったと思しき点は以下の如くである。

例えば、漢武帝「秋風辭」の「上行幸河東」を弘化三年刊本が「シャウ カトウニ ゲウカウシテ（「シテ」は「メ」字）」とするとところを、本書は、万治三年刊本及び「江戸前期」刊本が「シャウ カトウニ ギヤウカウシテ」（但し、万治三年刊本は平仮名。以下同じ）と同じくする。また賈誼「弔屈原賦」の「嫉罪長沙」を、弘化三年刊本が「ツミヲ チョウサニ マツ」とあるのに対し本書及び万治三年刊本、「江戸前期」刊本は、いづれも「ツミヲ チョウシャニ マツ」と。

但し、万治三年刊本及び「江戸前期」刊本に一致せず、反って弘化三年刊本と同じく読む箇所もある。

李白「春夜宴桃李園序」の「爲歡無何」を万治及び江戸前期刊本が「ヨロコビヲ ナスコト（コト字は「ト」）



イクバクゾヤ」とするのを、弘化三年刊本及び本書は「クハンヲ ナスコト（コト字は「ト」） イクバクソ」と。  
 また、細かく見るならば、万治三年刊本や「江戸前期」刊本、弘化三年刊本とも異なる部分も間々存する。王元之「黄州竹楼記」の「大者如椽」を万治三年刊本が「おほきなり ものは たるきの ごとし」を、「江戸前期」刊本は「ヲホヒナル モノハ タルキノ コトシ」、弘化三年刊本は「ヲホヒナル モノ タルキノ ゴトシ」、そして本書は「ヲホイナル モノハ エンノ コトシ」と。

(五) 嘉永三（一八五〇）刊『畫本古文真寶後集初編』

原装菊花空押文様深川鼠色表紙、原題簽「畫本古文真寶後集 初編 卷五」。封面に「有臺藤應著／旭輝齋畫  
 図／畫本古文真寶後集 初編 五卷／東都書林 玉山堂・学而堂 梓」。巻首に鄭本土文叙あつて「畫本古文真寶後集初編目録」。巻頭内題「畫本古文真寶後集初編卷一」。四周单边無界九行十六字。筆者蔵本は、存卷一（自  
 巻頭至賈誼「弔屈原賦」）、存卷五（自韓退之「雜說」至韓退之「獲麟解」）。巻末に『畫本古文真寶後集』二編から六編に至る近刻広告を載せ、刊記「嘉永三庚戌正月 山城屋佐兵衛・山城屋新兵衛・山城屋政吉」と。

題に畫本とある如く、本書は見開きに旭輝齋の絵を挿入し、本文もまた篆書、隸書、行草体によって裝飾されたものである。本文のみならず、小字注にいたるまで平仮名によって訓を施す。「歸峰園」の蔵書印あり。

訓を見れば、本書は、漢武帝「秋風辭」の「上行幸河東」を「しやう かとうに ぎやうかうして」、「草木黄落兮」を「さうもく きばみ おちて」（但し、万治三年刊本、「江戸前期」刊本は「さうもく」を「さうぼ

く」と) (弘化三年刊本及び三ツ切横本は「ソウ モク クワウ ラクシテ」、陶淵明「歸去來辭」を「きこ  
らいの ことば」(弘化三年刊本及び三ツ切横本は「キ キョ ライノ コトバ」)、韓退之「雜説」の「祇辱  
於奴隸人之手」を「ただ ぬれいの ひと の てに はつかしめられて」(弘化三年及び三ツ切横本は「タダ  
ヌレイ ジンノ テニ ハズカシメラレテ」)とするなど、古訓を残している場合が非常に多い。

但し、必ずしもすべてが万治三年刊本、「江戸前期」刊本に一致するわけではない。

例えば、賈誼「弔屈原賦」の「恭承嘉惠兮」の「承」字を両者が「うけたまわつて」と読むところを、弘化三年  
刊本及び三ツ切横本及び本書は、「うけて」と訓を振り、また周茂叔「愛蓮説」では「水陸草木之花」の「水」  
に万治三年刊本、「江戸前期」刊本、弘化三年刊本、三ツ切本いずれもが「スイ」と訓をつけるのに対し、本書  
のみ「する」とする等の例外もある。

### しりへに

以上、江戸期に出版された八種の『古文真寶後集』の総振り仮名付本につき、書誌とそれぞれの和訓の違いを  
示した。

ただ、筆者蔵本は端本が多く、刊・修・印の年代を追って詳細に検討することを得ない。和訓の変遷を辿るに  
はあまりにも資料的に乏しい憾をぬぐい切れない。例えば、長沢博士は『和刻本漢籍分類目録』(注五)の中

で貞享五年刊本、元文五刊本、また刊年不明の七行十五字本、文政十年刊本等、筆者未見の振り仮名付き本を挙げられている。

また、和訓を追ってこれを検討するためには、既に触れたが江戸期に出版された『文選』諸本に於ける訓読等も比較する必要がある。

こうした問題については、今後改めて資料を渉猟しつつ調査を行いたいと考えている。

(注一) 『和刻本漢籍文集』第二十輯所収、昭和五十四年 汲古書院

(注二) 木村次郎兵衛は、正保三年に『西行物語』を出版している。

(注三) 『言語文化くさぐさ 亀井孝論文集 5』所収 昭和六十一年 吉川弘文館

(注四) 同、亀井孝論文集5 所収

(注五) 『和刻本漢籍分類目録』昭和五十一年 汲古書院